

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 英文東欧問題参考書一二   |
| Sub Title        |   |
| Author           | 田中, 萃一郎   |
| Publisher        | 三田学会  |
| Publication year | 1910  |
| Jtitle           | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.4, No.1 (1910. 7) ,p.122- 124   |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            | 新著紹介  |
| Genre            | Article   |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100700-0122">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100700-0122</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 新著紹介

## 英文東歐問題參考書一一

田中萃一郎

1. Racial Problems in Hungary. by Scotus Viator (R. W. Seton-Watson). London. 1908

2. Hungary of To-Day. Ed. by Alden. London. 1909

九百六年以來匈牙利の政局を左右せる大同團結就中四十八年黨は商相コッシュユート等の溫和論者と代議院議長ユスト等の過激論者との間に内訌を招きしが爲、之を基礎とせるウエカール内閣を任せしは勿論、人をして匈牙利政局の前途に對し望洋の嘆を起さしめしが、今や總選舉の結果、四十八年黨の勢力地に墜ち、新内閣は多數の同志を擁し

て議會に臨めり。但し匈牙利の農民は總選舉を以て豊年に比す可しとなし、黃白の多少によりて四十八年黨を棄つるをも敢て辭せずと云へば去月の總選舉の果してマジヤーレンの眞意を代表せるや否やは疑ふ可し、尤もそのマジヤーレン以外の民族の希望に合へることは明なり。

セトン・ヴォトソン氏の著は、匈牙利民族に干する根本的研究の結果にして之を書物製造家の編纂物と同一視す可からず、紙數と時日とに限あるより主としてスロヴケン民族に就てのみ記述せるも、そのマジヤーレンが如何に爾餘の民族を虐待するやの實際は能く之を指摘せり。スロヴケン民族と云はゞその名稱さへも珍らしけれど、ルイ、コツシュユートの如きも元來スロヴケン民族に屬すると云へば教育普及の結果ネーレン、チェヘンと並び稱さるゝの日ある可く、その未だ現はれざるは全くマジヤーレン民族壓抑の致す所なり。英國代議士オールドレン氏の校訂に係る「今日の匈牙利」はウエカール内閣各大臣等の起稿して各方面より

匈牙利を説明せるもの、英譯にして、セトン・ヴォトソン氏の著述と併せ讀む時は、以て能く匈牙利の現状を了解し得可し。而して匈牙利に於ける民族問題の研究の如き、決して等閑に附す可きにあらず、新内閣が如何に之を解決するかは懸て、我對韓政策に向て適切なる教訓を供給し得べきなり

3. Turkey in Revolution. by C. R. Buxton London. 1909.

金角灣頭の半月旗は果して能く歐大陸を席捲し來れる立憲主義の疾風の爲に翻弄し去らるゝことなる可きか、とは何人の腦裡にも直ちに浮ぶの問題なるが、バルカン委員の一人として多年東歐問題を研究し、九百八年に土都に革命の起れる後、土耳其の合同進歩委員より招聘せられて、新議會の開院式に臨めるバックストーン氏の本書を繙く時は又杞憂を抱くの必要なきを感せん。開院式の記事皇帝謁見の記事共に活畫幅たるを失はず又サロニカを根據とせる青年土耳其黨活動の眞相を本書の如く明快に叙述せるものは少し。東歐問題研究

者は勿論、近世政治史に志すものが見違す可からざる好著述たり。

4. Greece in Evolution. Ed. by Abbott. London. 1909.

バルカン山南の小王國は九十八年に土耳其に對して無謀の戰端を開きしより、財政は益々困乏を加へ、國威は益々陵夷し去り、列國輿論の同情を去らんとするものあり。就中土都に國會の開設せられし結果青年土耳其黨の民族的自覺心は飽くまで希臘とクリートとの合同を妨げんとし、爲めにアゼンス政治家の狼狽煩悶察するに餘あり。茲に於てか佛國の「ヘレネ主義防衛同盟」會員中の有力家は宗教、經濟、文學、古跡等の各方面より希臘の現状を説明して以て一書を爲せり、而してこの、英譯本は、急進主義の政治家として名あるサー、チャールズ、デルクの序文を添えて公にせられたり新聞記者たるペイラーレ氏のマセドニアに於けるヘレネ主義を論ずる一篇の如き、論旨稍や偏頗の嫌なきにあらねど讀んで痛快なり。

三田學會記事

一二四

但し最近に於ける希臘の國狀を詳かにせんとせば  
本書に併せて去る四月刊行の The Quarterly Review  
に見えた Greece and King George の一編  
を讀むを可とす

三田學會記事

三田哲學會講演大會

近來本學文學科頗に勃興し、就中純文學の發展は殊に顯著なるを  
以て同哲學科は稍遜色あるを見るに至りしが茲に同學專攻者十數  
人聊か察する所あつて相結んで三田哲學會なるものを組織したり  
而して其第一着として之を具體的に現はしたるものは即ち去六月  
十一日午後一時より本學大學二十五番講堂に於て開催せる同會講  
演大會なり、先づ幹事堀梅天氏の開會の辭に次ぎ、文學博士遠藤  
吉氏の「治道家と心理」(偉人と哲學)と云ふ題の下に治道家と  
隆人間を全體として取扱ふ教育と社會を全體として取扱ふ政治と  
の兩面を兼ねる所のものなりと説き起して人格と哲學との關係を  
詳論し、思想を高尙ならしむると同時に一面精神修養の手引とな  
る東洋哲學は大に究むるの要ありと結べり、次に藤井健次郎氏は  
「道德の根柢」と題し、先づ十八世紀末葉より十九世紀初期に亘れ  
る功利主義を批評し、主觀的道德と客觀的道德とを區別し、吾人  
が道德上の責任を問はるゝは皆人格が行為に現はるゝが爲にして

人格の如何により行為の價値も定まるものなりと論及し、結局人  
格の自覺は道德の根柢なりと結び、最後に會長川合貞一氏は「自  
私の意識」と題し、先づ近世心理學の由來より説き起し、本論に  
入りてゼームス氏の自我に關する四個の見解(物的、社會的、心的  
純的)を挙げ其中の純的自我は人格統一にして是れ即ち自我なり  
と詳細に氏が鑑畜の一部を吐露したり、散會したるは午後五時に  
して當日は教授學生等多數の出席ありて甚だ盛會なりき、因に記  
す、同會にては眞面目に斯學を研究せむとする者の便宜を計り單  
に文學科に在る者のみに限らず一般に入會を許容する事に決定し  
たり。(は、は)

三田史學會大會

同會は去月十八日午後一時より慶應義塾大學第二十五番講堂に於  
て第一回講演大會を開き小澤幹事の開會の辭に次ぎ、田中教授は  
「慶應義塾と史學研究」と題し徳川時代に於ける歴史研究より説起  
し支那朝鮮に於ける歴史研究に及び、それより義塾創立前の學者  
の研究は史學と經學なりしと説き、義塾創立以來今日に至るまで  
の歴史研究の概略を述べ更に十八世紀以來勃興したる啓蒙主義唯  
理主義より十九世紀以來の研究狀態に移り、從來の研究法は科學  
的研究に非ざるも歴史も亦自然科学の如く一の科學とせざる可ら  
ずと論じて、バックル、ランプレヒト等の説を挙げ、我慶應義塾  
大學史學科は正に此任に當るべき重大なる責任ありと結べり次い  
で阿部教授は、「アウガスト・ヘルと其自叙傳」と題し歴史と傳

三田學會記事

一二五

記とを區別して傳記は主觀的要素多しとの前提より、得意の筆を  
振ひて其自叙傳により彼が六十餘年間の落魄たる生涯を語られた  
り、次で大森金五郎氏は「延喜時代に於ける都鄙文化の懸絶」なる  
演題の下に、一般に延喜時代は史上の黄金時代として考へらるれ  
ど實は是れ都のみに於けることにして鄙に於ては、全く之れと反  
對の狀態にありと説起し、其當時都に於ける學業の發達、學者の  
輩出、貴族の狀態等を述べざれど醍醐天皇の延喜年間諸臣に治國  
の意見を提出せしめし時、三好清行の意見書には、都のみ榮え鄙  
は至つて衰亡せる故之れを救済せざる可らずとあるが如く都と鄙  
とは其文化に於て大なる運庭ありと詳細に論ぜられたり、最後に  
宇野哲人氏は「儒教の根本思想を論じて支那歴史研究法に及ぶ」と  
題し、儒の意義より説起して、孔子の根本思想たる仁の意義に  
及び、我國大化の革新、鎌倉幕府の創設等其裏面は儒者によりて  
行はれたりと説き、鬼に角儒教の根本思想は支那歴史研究の上に  
必要なるものなりとし、從來支那歴史は手本、目的、濟世等のた  
めに書かれたるを以て、科學的の歴史として見ることを能はざれど  
も、さりとて凡て學問の研究に於て科學的のみにては無味乾燥な  
り、學問の研究に於て殊に人間を對象とする精神科學に於ては、  
人間を物質として見るのみにては不充分なりと論じ、要するに歴  
史の研究に於ては科學的方法を執るは素よりなるも、從來支那に  
於ける研究法の如きも或點に於ては全然没却することなく、兩者  
相提携茲に始めて研究の効果を待べきものなりと結べり、散會し  
たるは午後五時頃にして川合、神戸の諸教授を初め學生多數の出

席ありて頗る盛會を極めたり。(を、あ)

理財學會大會記事

六月十八日慶應義塾大學三十二番講堂に於て理財學會第五十回大  
會を開き會する者五百五十餘名、創立以來稀有の盛會なりき。今  
爰に其の概要を掲げ午後一時氣賀教授は起ちて開會の旨を宣し、  
本會の歴史より其目的を述べ、次で河津博士は不正競争と商業道  
徳なる題下に兩者の關係を論じ、不正競争取締方法に及べり、曰く  
不正競争激甚なる米國よりも其度甚しき我國にとりては最も注意  
を要する問題にして、取締その當を得ば經濟上の秩序發展のみな  
らず商業道德に及ぼす効果大なるものなれば、深き研究を爲さざ  
る可からず。元來自由競争は今日の經濟界を現出せし基礎たるも  
のなれど、それには明暗二面あるの結果經濟界の階級争闘起り貧  
富の懸隔爲めに生ずるに至れり。之れ労働問題の原由を爲すもの  
にして、不正競争は實にその一つを形作るものたり、その弊害多  
大にして一は世人を欺瞞し他は正當なる競争者の利益を害し衆人  
の經濟上の知識缺乏せるに乗じて他を欺き身は經濟上敗者なるに  
拘はらず勝利者となり、相手の貨物を毀損して以て損害を及ぼし、  
爲めに正當に營業に従事せる者の地を奪て、劣者の位置に立たし  
むるに至る等其手段惡辣を極む、是れ近時各國が此不正競争を防  
止せんが爲めに諸種の法規を設くる所以なれど果して實績あるや  
否やは疑問なり。之れ不正競争と正當なる競争との分界線を認む  
る頗る困難なる爲めに於て、前述の如く經濟界に於ける大原則た